HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	イエズス会による日本の三布教区分について ： Ximo,Bungo,Miyako
Author(s)	高橋, 裕史
Citation	基督教学, 30, 33-37
Issue Date	1995-07-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46561
Type	journal article
File Information	30_33-37.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

イエズス会による日本の三布教区分割について
―Ximo, Bungo, Miyako―

高橋裕史

I

近世日本キリスト教史については、個々の宣教師による宣教・改宗活動や教育事業、布教団構成や布教体制など多角的に論じられている。しかしそうした多岐に渡る布教活動が具体的に展開される場である布教地自身の開拓や経営については積極的に論じられていないのが現状である。

そこで本報告ではこのような研究状況を鑑みて、アレッサンドロ・ヴァリニャーノ Alessandro Valignano によって打ち出された日本の下(しも)・豊後・都の三布教区制を取り上げ、右に掲げた課題について一つの試論を呈してみたい。

II

日本が下・豊後・都の三布教区に分割されたのは日本が極めて広大であり且つ在日イエズス会士が少数であったため宣教・改宗活動が充分に行い得なかったことにその原因が求められる。具体的には遠隔地からの宣教師派遣の要請や布教の求めに応じられなかったこと、改宗後の教導がなされていない信者が大勢いること、布教地視察を充分に実施し得なかったこと等がその主要な弊害であった。

一方、日本全体の上長も、日本の広大性と宣教師不足が足枷となって日本国内の布教地巡察や宣教師達との協議を随時行い得なかったこと、自身に代わり遠隔地を巡察する人物を有していなかったこと、という状態にあった。つまり日本全体の上長は『イエズス会会憲』によって課せられていた布教地巡察や部下との精神的一致の強化などの義務を果たし得ていなかったのである。

以上の問題を解決するためにヴァリニャーノは一五八〇年六月二十六日付で作成した『日本の上長のための規

則』において、日本を下・豊後・都の三布教区に分割し各々に布教区長を一名配置して統治させること、日本全体の上長は三年毎に日本全体を、布教区長は毎年担当地区を巡察すること、以上のような指示を与えたのである。その狙いは日本の広大性と宣教師不足による在日イエズス会士の重負担を下・豊後・都の三布教区に分散し各布教区長に管轄地区の統治を委任することで宣教・改宗活動を効率的に進め、日本という広大な空間を分割統治することにあったと考えられる。その上で日本全体の上長は日本布教を大局的に把握・統治し、各布教区長は個別に担当地区を統治する、言わば日本全体の上長と布教区長の相互補完による広域統治体制とも称すべき制度がここに案出されたのであった。

III

ところで、右に記したプロセスを経て創出された下・豊後・都の各布教区は各々どのような特質を有していたのであろうか。

まず下布教区の場合、マカオからのポルトガル船の定航地であり日本全体の上長が常駐する長崎を中心空間としており、「日本のキリスト教の最大の力」として位置付けられていた。

豊後布教区の場合は領主大友宗麟の保護のある安全な地であり集団改宗の可能性のある「布教の発展途上地」であった。更にインド副王やポルトガル国王との接触を持った宗麟の治める地として海外に知られていた対外的名望の地であった。また下布教区とは異なり貿易業務等に煩わされずに聖務や修道精神の涵養に努め得る場でもあった。

都布教区は京都が実質的な拠点であり、その京都で成功を納めることは日本でイエズス会の信頼と名誉を獲得することを意味していた。つまり京都を中心とする都布教区はイエズス会の対内的名望確立の場であったと考えられる。また、一般に人々の知性と宗教心が高く概して宗教的・精神的な動機から改宗を求める人々が多かったこと、ポルトガル船の利益を梃に布教を推進して行く必要も左程なく、本来の宣教・改宗業務の遂行をある程度保証してくれ得る場であったことも都布教区の特質であった。

ではこのような「個性」を有する三布教区に対していかなる経営方針が採られることとなったのであろうか。

Ⅳ

まず下布教区に対しては長崎港の存在を加味して日本に派遣されたイエズス会士が日本語や日本の習慣を学べる機関を設けることが立案された。同時に長崎を異教徒勢力からの攻撃に耐え得る堅固な地とする必要性も認められた。豊後布教区の場合、コレヒオと修練院を設けて将来の司祭の養成に努めること、宣教師の協議会の開催地とすることが基本路線として打ち出された。都布教区については哲学その他の諸学問を教授するコレヒオを設けイエズス会士に学ばせることとした。

以上が下・豊後・都の各布教区の経営方針であるが、次にこれらの方針がどの程度まで実行に移されたのか、という点について見てみたい。

Ⅴ

下布教区では一五八〇年十月に有馬にセミナリオが開設され、長崎では大砲・銃・弾薬等がポルトガル人から調達され防御柵も造られて一五八一年頃に軍事的要塞化が完了した。一五八三年にはミゼルコルディア教会が落成し癩病院も完成した。

豊後布教区では一五八〇年十月に臼杵に修練院が、一五八一年三月には府内にコレヒオが開設された。豊後布教区での顕著な事業はこの二つであった。

都布教区では一五八一年の十月に安土にセミナリオが開設され領主層や高身分者の子弟が教育対象とされた。またキリスト教関係の諸典礼も盛大に挙行された。

右に記した開拓事業に加えて三布教区の各々にはパードレとイルマンの駐在所たるレジデンシアが増設され各布教区内における布教の前進基地として機能することとなった。

このように下・豊後・都の三布教区では各々の特質を考慮した経営計画が立案され実行に移されたのであった。言わば下・豊後・都という「土地への適応」による統治体制であったということができよう。

次にこれら三布教区の財政面について見てみたい。三布教区の各々には長崎の財務担当パードレたるプロクラドールから一定額の経費が割り当てられ、その中から個

別の経費を必要に応じて支出していた。また各布教区長は割り当てられた経費の中から管轄下の布教区内にある布教機関に居住しているパードレ達にある程度の額を支給していた。ただし臼杵の修練院にはインドのバサインで入手した土地からの収益を、府内のコレヒオにはポルトガル国王からの年金を財源として充当していた。これら三布教区の全体経費とは別枠で各布教区長には進物や供応、視察などの特別の出費のための経費が設けられており、その額は多い時で日本イエズス会の年間経費の一割強に相当した。

最後に指揮系統についてこれまでに判明している処を記してみるならば、まず三布教区長とも日本全体の上長の指揮下に服しており、布教区長の任命や更迭は日本全体の上長にその権限があり、布教区長は三年毎に更迭されることとなっていた。また布教区長は担当地区内のパードレやイルマンのカーサへの配置換えの権限を有していた。三布教区長間の上下関係についての詳細は不明であるが、一五八二年の二月に『下布教区長のための規則』が作成されていることから考えるならば、下布教区長が三布教区長の中で最も重要なポストであったことが想像され得る。

VI

以上、日本の三布教区分割について記して来た由であるが、残された問題は多い。下・豊後・都の各布教区長に与えられた統治権限のうち、共通するものと相違するものにはどのようなものがあったのだろうか。また日本全体の上長の有する権限のうち、これらの布教区長にどの部分が委任割譲されていたのであろうか。またこうした指揮系統の問題とは別に、下・豊後・都の各布教区内にある個別地区における布教活動や経営内容の実際はいかなるものであったのだろうか。日本全体を鳥瞰するキリスト教史はあっても、その構成要素たる個々の地域に関する「地域キリスト教史」は比較的看過されて来た嫌いがあるのではないだろうか。これらの研究を今後の課題として行きたく思う。

付記

本報告は加・除筆のうえ「イエズス会による日本の三布教

区分割とその経営―下と豊後、そして都―」として『歴史評論』に掲載の予定である。